



No.377 令和元年11月22日

おおたこうれん

発行所
東京都大田区南蒲田1-20-20
電話(3737)0797・FAX(3737)0799
一般社団法人大田工業連合会
発行人 会長 舟久保利明
E-mail: office@ootakoren.com
ホームページ: http://www.ootakoren.com/
印刷所
東京都大田区下丸子2-24-26
電話(3758)7788
光写真印刷株式会社



自社の製品を見せながら自社をアピールする青年部の企業



当会の舟久保利明会長も当日の様子を視察



佐々木哲校長



松島秀仁専務取締役

「マッチングセッションOTA」開催

青年部の企業が工業系高校生に自社をPR

当会の青年部連絡協議会が主催する「マッチングセッションOTA2019」が、9月27日に大田区産業プラザPiOで行われた。初開催となるこの取り組みは、若手人材の発掘を念頭に青年部の会員企業と都立六郷工科高等学校の生徒とのマッチングを図る目的で企画。少子化で多くの企業が人材獲得に課題を抱えている一方、自校のお膝元である大田区のものづくり企業と生徒との接点を作りたいという高校側からの要望もあり、両者のニーズが合致して実現に至った。

青年部からは、東蒲機器製作所、極東精機

製作所、山田製作所、泰信製作所、日新電気、第一金属工業、富士テクノマシン、松島商工、渡辺精機、新妻精機、上田製作所、エース、西居製作所、松浦製作所、昭和製作所、三陽機械製作所、トキワ精機、平川製作所、磐梯工業、関鉄工所、ムソー工業の計21社が出席。プロダクト工学科、システム工学科など5つの学科を擁する六郷工科高校からは約330名の生徒が参加し、午前は2年生中心、午後は1年生中心の2部に分けて行われた。

各部の冒頭には六郷工科高校の佐々木哲校長が開幕の挨拶。「生徒のみなには、大田区の

ものづくりがどんな経営者や技術者たちによって成り立っているかを知って帰って欲しい」と呼び掛けた上で、企業関係者には「今の高校生が何を考えていて、企業にどういうことを求めているかということ、ぜひこの機会に引き出して欲しい」とリクエスト。その上で「お互いの理解を深めて、本校の教育内容も大田区の企業が求めるものに変えていきたい」と意欲を語った。

午前の部、午後の部ともに90分の開催時間のうち、1社あたりのセッションタイムは12分。生徒はあらかじめ事前に希望を提出した5社のブースを順番に訪ねる。各ブースでは経営者や若手社員らが生徒の前に立ち、自社の商品や特殊技術、社内環境のアピールポイントなどをプレゼン。さらには質疑応答の時間も設けられ、生徒と企業人が双方でコミュニケーションを取れる仕組みも。また、佐々木校長の提案で各自1セッションずつ「もぐもぐタイム」のターンがあり、ドーナツと飲み物でパワーを補給しながら集中力をキープする工夫もなされていた。

普段から様々な場面で話している経営者たちも、高校生相手に自社の魅力をPRするとなると大人相手のプレゼンとは勝手がまったく異なる。社会に出る前の未成年の心を掴むには通る一遍の話では不十分。ある意味、プレゼンをする側にとっても「人間力」が試される場といえるような状況の中、話す側から積極的に生徒の発言を促してみたり、頼れるお兄さん的な口調で親近感が湧くように話してみたり、座談会形式で和やかな雰囲気を作ってみたりと、どの企業もそれぞれの工夫が目立った。

また、プレゼンの中身も純粋な企業紹介ではなく、「どんな仕事をしたいのか」「自分にはどういった仕事に合っているのか」といった職業感の話や、話の織り交ぜたり、「10代・20代の若手社員がどれだけ活躍しているのか」といった生徒にも身近なネタを盛り込むなど、生徒たちでも理解しやすく、興味を引くような心がけが見られた。

六郷工科高校では既に9月中旬から3年生の就職試験がスタート。2年生もこれから徐々



聞く側も話す側も真剣



プレゼンにも各社の工夫が



21社の詳しい資料も配布



ドーナツで「もぐもぐタイム」

に就職を意識する時期に入る。そうした中、特に午前の部では「どのぐらいで一人前の技術が身につきますか?」「女性でも活躍できますか?」など、生徒からも現実的な面への質問が飛び出し、どれも熱量の高いやりとりが繰り返られていた。

午後の部の終わりには、青年部で主導的な役割を担った松島商工の松島秀仁専務取締役が挨拶。「本場に手探りの状態でスタートした企画だったが、午前の部、午後の部とどちらも盛況に終わってホッとしている」と本音を述べて安堵の表情を見せた上で、「この機会から何か糧になるものを持ち帰って、今後の学生生活を有意義なものにしてほしい」と未来の工業人たちにエールを送った。

午前・午後合わせて全12セッションを完結した青年部の面々は、みな揃って声が枯れるほどの奮闘ぶり。若い人の熱気の中で熱く語る彼らの姿は、誰もがいつもより10歳くらい若々しく見えた。全員が一日のエネルギーを使い果たした様子だったが、その表情には確かな充実感が浮かんでいた。ここで生まれた縁から実際に大田区で活躍する工業人が生まれるかは未来になつてみなければ分からない。ただ、地元高校から地元のものづくり企業へ人材供給の流れを強めるきっかけ作りになったことは間違いない。第1回は大成功の手応えを掴んだだけに、次回以降の開催にも期待したい。

「夏のロボット作り教室」開催



PiO1 階の大展示ホールに 120 組の親子が来場



親子で協力してロボット作り



サポーターの芝浦工大生も大活躍

8月24日・25日の二日間、「親子で楽しむロボット作り教室」が大田区産業プラザPiOで行われた。当会と区が共催するこのイベントは芝浦工業大学 地域連携・生涯学習センターの協力を受け、区内に在住・在学の小学1年生から4年生を対象に毎年この時期に行っている企画。今年も多数の応募の中から抽選で選ばれた120組の親子が参加した。

2日間にわたるプログラムは、初日にロボット製作、2日目は芝浦工大・長谷川浩志教授による講演会と競技大会、デザインコンテストという盛りだくさんの内容。芝浦工大からは学部生と附属高校の生徒が15名以上が参加して親子のサポート役を担った。

親子が作るのは「ビートル」という四足歩行ロボット。約150個の部品からなるツインモーター式のロボットで、ナイロンナットやタッピングネジなど

ど子供はもちろん保護者も聴き慣れないような部品もたくさん。パレットに広げた部品の中には、机の下に落としてしまったら簡単に見つからない小さなネジもある。低学年の児童も多く、なかなか集中力が続かない子もいるが、親子で協力してひとつのロボットを組み上げていく。

工作中は各列にサポーターの芝浦工大生を配置。常にごくでヘルプの手が上がる中、一人でも何組ものサポートを行う学生たちは皆揃って大忙しの状況だったが、児童に教えるという経験は、彼らにとっても学びにつながる機会になっただろう。お昼前に組み上がる子もいるが、テストで床を走らせてみるという進まないということもしばしば。このあたりからは、焦って早く作るよりも不具合ないように正しく組み立てるのが大事ということを学んだに違いない。



2日間で一番の熱気となった障害物競走の決勝戦



表彰を行った西川事務局長



自慢の一台を見せ合う子供

2日目は子供たちが主役の一日。それぞれ個性的に装飾されたロボットで機動性とデザインの秀逸さを競う。様々な素材を使ってデコレーションできるところもビートルの醍醐味。ただ、見た目が良ければ何でもOKということではなく、重さは1キログラム以内、幅はA4サイズ用紙以内など、細かな競技規定が設けられ、その範囲内で優劣を競う。

視線が集中。特に準決勝以上はコースの周りを子供たちが取り囲むような状況で、「がんばれ!」の大声援の中で優勝者を決定した。

一方で、惜しくも予選で敗れた子供たちは徒競走競技にもチャレンジ。純粋なスピードを競う、こちらの競技も大いに盛り上がった。

競技大会のメイン種目は障害物競走だ。予選ブロックは全体を8組に分けた総当たり戦。幾つかの課題が設置された障害物コースでタイムを競う1対1の対決で、各ブロックの成績上位者が勝ち上がり制の決勝トーナメントに進出できる。保護者が見守る中、予選から一戦がまさに真剣勝負、ガッツポーズあり、喜びの笑顔あり、歓声ありという熱戦の連続。時に負けた悔しさで泣いてしまう子もいるが、そこも審判の学生たちの優しい声かけで元気を取り戻す。競技中に故障してしまう場合も地域連携・生涯学習センターのベテラン技術者が修理コーナーに待機。万全のサポートで大会を盛り上げていた。

閉講式では障害物競走とデザインコンテストから優秀者を各10名、徒競走競技の上位3名を表彰。当会の西川事務局長から子供たちへ表彰状と記念のメダルが贈られた。障害物競走の上位10名には、秋に芝浦工大で行われる全国大会の出場権も与えられた。

その後の閉講の挨拶では、長谷川浩志教授が「子供たちがロボットを作る機会というのはなかなかありません。ぜひ自分の手で作ったという感動を楽しかった思い出とともに持ち帰って、『私たちでもできるんだ』という自信に繋げてください」と総評を述べ、2日間のプログラムが終了。ものづくり体験あり、競技大会ありという充実の2日間は、子供にとっても保護者にとってもかけがえのない思い出になったことだろう。

令和元年度優良従業員表彰者

十月十八日(金)開催の当会正副会長会において左記二五名の方の受賞が決定しました。おめでとうございます。

森田 秀和	(株)三桂製作所 技術部次長	蒲田工業協会
木内 祐史	(株)三桂製作所 営業第一課 課長	蒲田工業協会
石田 勇	(株)三桂製作所 技術部グループリーダー	蒲田工業協会
大橋 明美	(株)三桂製作所 名古屋支店課長代理	蒲田工業協会
川口 三奈	企画	蒲田工業協会
福田 弘	日本電機(株) 技師	蒲田工業協会
松本 順一	日本電機(株) 主任技師	蒲田工業協会
武藤 宏美	日本電機(株) 参事	蒲田工業協会
荒井 秀明	大阪営業所所長	蒲田工業協会
俵 保之	日本電機(株) 改修チームリーダー	蒲田工業協会
岩崎 清隆	海外営業本部	蒲田工業協会
愛甲 貴之	桂川電機(株) 台湾三桂出向	蒲田工業協会
木村 紀子	桂川電機(株) 財務経理本部	蒲田工業協会
津山 弥生	桂川電機(株) 課長	蒲田工業協会
吉田 明子	桂川電機(株) 販売管理本部	蒲田工業協会
田邊 理恵	桂川電機(株) 財務経理本部	蒲田工業協会
松岡 達生	桂川電機(株) 製品開発本部	蒲田工業協会
荒井 聡	桂川電機(株) 課長	蒲田工業協会
増田 貴也	品質保証本部	蒲田工業協会
神山 祐二	桂川電機(株) 製造部部長	蒲田工業協会
末谷 元男	桂川電機(株) 製造部部長	蒲田工業協会
保坂 久志	桂川電機(株) 営業部課長	蒲田工業協会
佐々木 豊	桂川電機(株) 業務課課長	蒲田工業協会
田辺 唯史	桂川電機(株) 製造部部長	蒲田工業協会
森田 コア	桂川電機(株) 製造部	蒲田工業協会
(株)本州機器製造所	(一社)大森工場協会	

第1回 経営・マネジメント セミナー

～失望の中から本当の希望が見える～

本年度1回目の経営・マネジメントセミナーが10月3日に大田区産業プラザP10で開催された。今回は東京大学から玄田有史教授を講師に招き、「希望」をテーマにした講義が行われた。

10年前から「希望学」の研究に取り組み、希望と社会との繋がりなどを調査してきた玄田氏。まず最初に「日本人の中に『希望』が



ユーモアあふれる講義が行われた会場

今年2回目の「産業のまち発見隊」が8月21日に開催された。区内に在住・通学する小学4年生から6年生を対象として毎年夏に開催しているこの催し。今回も多数の応募から抽選で選ばれた22組の親子が参加した。この日のスケジュールは午前には工場見学、午後は日本工学院蒲田キャンパスでものづくり教室という流れ。朝9時前に大田区産業プラザP10を出発した行は、現地で2班に分かれ、桂川精螺製作所と光写真印刷の2社を順番に訪れた。

もう1社の光写真印刷では、オフセット印刷や製本の現場を見学。普段、手にする本の紙面がどのようにデザインされるのか、そして、紙に刷られて本の形になっていくの

第2回 「産業のまち発見隊」開催



数々の著書がある玄田教授



貴重な話に耳を傾ける参加者たち

広く一般的になるのは、明治時代に入って西洋の考え方が入ってきたからのこと」と語った玄田氏は、希望とは「まだ不確かだが、少し先に見える光」と説く。例えば、手塩に掛けた人材が簡単に辞めてしまふのは、「目の前の業務に忙殺されて潰れてしまふ人も、自分の能力に限界を感じて去ってしまう人も、どちらも灯台のような希望の光が見えていないところに原因があるのでは」と指摘する。



稼働中のネジ工場を見学



大人気だったネジ作り体験



桂川精螺製作所の新工場

かという工程を実際の作業を見ながら学んだ。一連の説明の中には、揮発性有機化合物（VOC）の発生が少ない大豆インクの使用や廃棄紙のリサイクルなど、環境配慮に関する話もあり、現代に即した印刷工場のあり方を知ることができた。

午後のものでづくり教室では、LEDの残像で文字や記号が表示できるバーサイライタという装置を製作。基盤に電子部品や電池ボックスをハ



ハンダ付けを初体験



多くの学生が教室をサポート



表示したい記号を作画

事務局から 第4回



今月号では、小学生から高校生までの子供たちを対象にしたイベントを多く取り上げています。

夏と秋のロボット教室は、芝浦工業大学と都立産業技術高専に協力いただきながら10年以上継続している取り組みです。今回は秋のロボット教室でとても嬉しいエピソードがありました。学生アシスタントの中のお一人が、小学生の頃にこのイベントに参加された方だったのです。

どのイベントでも、参加者の方々に「大田のものづくりの将来を担う子どもたちのために」と述べてきましたが、実際にこうした取り組みをきっかけに新たな“希望”が生まれているのは大変喜ばしいことです。

また、青年部が今年新たに企画した「マッチングセッションOTA 2019」では、都立六郷工科高校から大勢の生徒に参加いただき、会場は若い方の熱気にあふれていました。後日行った報告会では、参加企業の方々から「プレゼンの仕方でも学べた」「今後も続けていきたい」など積極的な意見が多く聞かれました。この取り組みは1年後、2年後の近い将来に成果が見込まれます。会員の皆様のご協力があったからこそです。多くの実りがありますよう、引き続きご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

秋のロボットセミナー開催



技術高専の生徒がしっかりサポート



積極的に手を挙げる子供の姿も



自分の力でロボットを作る

初めのうちは自力で出来ても、工程が進むにつれて難しい局面に差し掛かる。早い子は2時間ほどで組み立て終えるが、電池を入れて動作確認をしてみると正しく動かないことも。そんな中で徐々にサポートする生徒の出番も増え、

浅川准教授から説明を受ける、子供たちはさっそく持参した工具を手に持ち、工作をスタート。コロボ2は、2枚の有孔ボードにセンサーや電池ボックスを取り付けて二輪車を作るキット。保護者も見守る中、どの子も真剣な表情で、穏やかな雰囲気にもまれて作業は進んでいく。

この日は「KOROBO2(コロボ2)」という二輪駆動ロボットを製作。午前9時にスタートしたプログラムは、午前に本体の組立て、午後はプログラミングでの動作設定を行う流れ。都立高専からは全体を指導する浅川澄人准教授に加えて7名の学生が子供たちをサポートする。

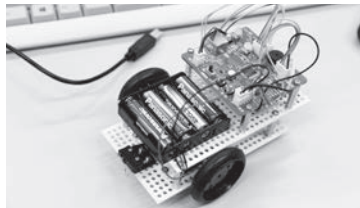
区内に在住・在学の小学5年生から中学2年生を対象とした「秋のロボットセミナー」が、10月19日に都立産業技術高等専門学校で行われた。この催しは当会と区が共催している秋の恒例イベント。今年も多く応募の中から抽選で選ばれた40名の小中学生が参加した。



ライントレースなどの課題にトライ



専用ソフトでプログラミング



今回作った KOROBO2

「すみません！」と元気の良い声で生徒を呼ぶ子供たちの積極性も光っていた。昼食を挟んで午後はプログラミング作業へ。なかには午後の開始を待たずに作業を始める子もあり、教室内は子供たちの熱気で充滿。コロボ2は本体とパソコンをUSBケーブルで繋げて好きな動きを設定させることが可能。プログラミングするには、「前進」「停止」「回転」など様々な動作が設定できる専用ソフトを使用。先ほどまで工具を持っていた手を今度はマウ

スに置き換え、浅川准教授から出された4つの課題に挑戦した。自分の作ったロボットが自在に動くというのは、子供たちにとっても新鮮な体験だった模様で、どの子も自分の席とテストコースを何度も行き来しながら課題のクリアに頭をフル回転。終了後のアンケートでは、ほとんどの子が「とてもおもしろかった」という嬉しい回答。「意外と

た」など様々な声が聞かれ、各々ものづくりの楽しさを知る機会になったようだ。実は今回のサポート役の中には、過去にこのロボットセミナーに参加したという生徒もおり、こうした地道な活動が新たなものづくり人材の発掘に寄与できていることが実感できた。今年参加した子供たちからも未来の工業人が生まれることを期待したい。

特撮のDNA

平成ガメラの衝撃と奇想の大映特撮

2019年 12月13日(金) — 2020年 1月26日(日)

11:00開場～19:00閉場(最終入場18:30) ※土・日・祝日は10:00開場
※2019年12月31日(火)・2020年1月1日(水)・1月11日(土)は休館

一般 1,800円/大田区民割引 1,100円/65歳以上シニア割引 1,100円
●一般社団法人 大田工業連合会は、「特撮のDNA」展に協力しています

日本工学院専門学校 [ギャラリー 鴻]

大田区西蒲田5丁目23-22 学校法人 片柳学園12号館 JR蒲田駅西口より徒歩4分
主催 ■「特撮のDNA」展 制作委員会 共催 ■大田区 協力 ■一般社団法人 大田工業連合会ほか

※小学生以下無料
©2019「特撮のDNA」展 制作委員会
©KADOKAWA TNHN/1999

大怪獣ガメラ
蒲田に上陸!